

フェミニズム・ナショナリズム・植民地主義

金 友子

金友子（きむうちや）と言います。よろしくお願いします。

先ほど鄭柚鎮さんから、痛みの意味作用という観点からお話がありましたが、私のほうは、感覚というところから言うならば、相当鈍感になろうと努力しながらこの本を読んだと思っています。とてもこの本はとても冷徹に読まねばならないのではないか。なぜかそのような強迫観念にとらわれながら読みました。

この本には、山下さんがここ 10 年間ぐらいのあいだに、いろんなところで書かれてきたものがまとめられています。そのうちのいくつかは、発表されるときに現場にいたこともあり、非常に懐かしく思い返しもしました。

まず、ご自身の韓国留学の経験とアイデンティティーの悩み、そこでの女性学との出会いについて語られています。この場では幼少期の話は省かせていただきますが、「慰安婦問題に取り組むなかで、女性学的思考を深めると同時に、運動との一体感を持つことによって、アイデンティティーの悩みを克服しようとした」（山下英愛『ナショナリズムの狭間から―「慰安婦」問題へのもう一つの視座』明石書店、2008 年、4 ページ。以下、本書からの引用の場合はページ数のみを表示）と述べられています。

しかしながら、山下さんはその運動の中で葛藤します。運動の展開の中であらわれた、被害女性に対する異なる価値づけ、具体的には朝鮮人女性＝一般の女性、日本人女性＝娼妓と分ける思考方式や国民基金の受け取りをめぐる被害者の思いよりも運動を優先させた活動家たちのとの見解の違いに違和感を覚え、そのような「民族中心的な慰安婦認識」に直面するなかで、「韓国人と一体感を持っていると思っていた自分が、何か思い違っていたのではないか」と葛藤するわけです。

そして、山下さんはこのように問います。すなわち、フェミニズムや女性主義を語り、韓国社会の女性差別を告発してきた運動体の活動家たちが、なぜ慰安婦問題に関してはナショナリストになるのか、と。（ナショナリズム＝男性中心的価値観）

私は、これに付け加えたい問題提起があります。それは、ナショナリズムを問うということと植民地主義を問うということの関係といえるかもしれません。この本のタイトルでもありますが、「ナショナリズムの狭間から」で想定されているナショナリズムは、おそらく日本と韓国のナショナリズムでしょう。一方で、韓国のナショナリズムについては、（韓国の）フェミニズムの観点から問う議論はしておられますが、日本のナショナリズムについては、何か非常に抜け落ちていくような感じがせざるをえない。そのように感じました。

「慰安婦問題に投げかけるもう一つの視座」（本書サブタイトル）というのは、だとすれば、民族主義アプローチが支配的だったところにフェミニズムあるいはジェンダーというものが、

「もう一つの視座」として提示されているのであろうと受け止められます。これを論じていくなかで、慰安婦問題の運動のなかでおこなわれてきたことのうち、慰安婦問題を山下さん自身のナショナルアイデンティティーの悩みと結びつけて考えてみたということが、本書の通奏低音となっていると思います。

第3章以降では、韓国で慰安婦問題を提起する理論的基礎となった女性学の進展とその慰安婦認識について述べるということを目的として、フェミニズムの視点から性と民族の様相をどのように見るべきかについて考察しています。

山下さんの整理によれば、韓国の女性学の展開、および女性運動の展開は、上昇志向の女性たちだけではなくて、一方で労働者などの下層の女性たちの問題に関心を寄せていた人々によって展開されつつ、他方で女性学がどんどん学術化していくというかたちで展開されました。この展開過程で、性・民族・階級の相互関係は女性運動の路線と関連づけられて論じられたのですが、その論法は女性問題を階級や民族の下位に置く女性運動の主流的観点から、性の問題を重視する立場を批判するものであったことが指摘されています。このあたりから、女性学と女性運動のあいだの溝が広まっていったようです。アカデミズムと運動の結合を困難にしたより根本的な問題として山下さんは、近現代の韓国女性運動が経てきた民族的状況の厳しさと、それに規定された女性運動と民族民主運動との関係性を挙げています。

そして、慰安婦問題が提起された当時には——この点は非常に重要だったと思うのですが——、男性中心主義的な社会で慰安婦問題が、女性問題であるがゆえに取り上げられてこなかったことに対する怒りが確かにあって、そのうえで日韓間の過去の清算が不充分だというふうな認識があったと言っています。そのうち過去の清算が不充分だったというところばかりが強調されていくことで、韓国の男性中心的な社会を問うという観点が後景に引いていってしまった。この「後退」とも言える状況がなぜ起こったのか。

第4章では、韓国のなかでの慰安婦問題の展開と、そのなかで問題になったことが論じられていきます。慰安婦問題解決運動に携わってきた山下さんが、最も深刻に感じてきた問題点、すなわち、韓国の慰安婦問題解決運動と大衆的言説が持つ民族主義的傾向を論じたのが第4章です。

ここで言う民族主義的傾向とは、この問題、慰安婦問題を植民地支配下でなされたいくつもの収奪と民族性抹殺の一つとして、すなわち民族問題として認識するということです。もちろん山下さんは、慰安婦問題が民族問題の側面を持つことも理解しており、民族の問題としてののみでなく、女性問題としても認識する視点が必要であると述べています。が、慰安婦問題の根底には女性抑圧がある¹⁾という考え方が、本書を貫いていると思われます。

いったんちょっと整理をしますと、慰安婦問題における民族問題とその側面とは、切りつめて言えば、ある民族の構成員であることによって被害を受けたという認識方法です。この認識の仕方が強まると、ある民族の構成員であることによって被害がより大きかった、あるいは、民族抹殺の一部だったとなります。これが民族主義的言説になると、ほかの民族は被害を受けていないとする「被害の占有」がおこなわれ、ほかの民族の被害は軽いというような「被害の序列化」がおこなわれ、朝鮮民族の誇りを傷つける行為だとして被害女性の被害を無視したり、スティグマ化する。そうして被害の治癒は無視される。山下さんが強調するのは、民族主義的

な思考方式が、性暴力で得た傷の実態を見えにくくしたということです。加えて、自分たちに非はなかったというために、韓国の男性中心主義は問わないということにつながり、自分たちのやったことはそれほど悪くないとして、例えば、韓国軍が朝鮮戦争のときにつくった慰安所の問題を軽視するような話になったりもする。

つまり、山下さんが問題視するのは、第一に、「問題」を民族間で生じたこととしてのみ捉えることによって、女性が副次的存在に置かれること、および集団内の女性差別が不問に付されることだと言えます。第二に、問題の解決とはいえ、そこに迎合する、あるいはせざるをえない女性運動への違和感、第三に、慰安婦問題の本質とは、人権の問題であり、性の問題であり、女性に対する暴力の問題であるというふうな主張をしています。このへんはちょっと微妙ですけども。

ただ、ここでやはり一つ問題が挙がると思います。最初に言及した点にも関わりますが、ナショナリズムを問うというとき、とりわけ韓国のナショナリズム、そのなかでも過去の歴史とかかわって表出されるナショナリズムは、そのみで構成され成立しているものではないのではないか、ということです。

しかも、植民地支配や、植民地支配のなかでおこなわれたことを問うなかで形成されるナショナリズムは、対日本いわゆる「反日」ナショナリズム、つまり、日本および日本のナショナリズムとの関係のなかでつくられるものだと私は考えています。それゆえ、ナショナリズムを問うといったときに、その一方にある日本のナショナリズムがあまり問われていないのではないことが気にかかるのです。

ナショナリズムという観点から見れば、慰安婦問題を民族問題として提起したことは、ナショナリズムを利用する戦略的行為とも見てとれます。しかし、実際の問題として、日本軍の犯した犯罪であり、日本政府による犯罪の認定を問うことが問題だったという、おそらく非常に単純な事実の問題があるのではないかと思います。

もう一つ、少し引っかけたことがあります。「被害の重層性」について述べるなかで(176-178)、社会全体の PTSD があるのではないかと述べられています。第一の重層性は、被害を受けた当事者のもので、「慰安婦」が受けた直接的被害およびその後の社会的無視や日本政府の否認による被害です。そして、それが解決できていないことによって、実際にその被害を体験していないが当該社会の構成員であるがゆえに社会全体が「心の傷」を負ってしまうことに言及しています。例えば、次のように述べています。

「知識人活動家たちも実際の体験の有無にかかわらず。植民地支配民族として心の傷を受けた。また、同じ民族の女性が「慰安婦」にさせられたという事実から受けた衝撃による被害もある。さらにサバイバーたちと同様に、日本政府が「慰安婦」問題に対する責任を否定している所からくる被害もある。すなわち、韓国の「慰安婦」問題解決運動の主体たちは、みな植民地支配と「慰安所」制度によって間接的にせよ重層的被害のもとに置かれてきたのであり、そのような意味で、みな心の傷を受けた“被害者”たちであるともいえる」(177)

結局、運動にかかわっていた人、あるいは、運動にかかわっていた人みんなが「被害者」であり、それゆえ慰安婦問題解決運動が、直接の被害者のための運動であると同時に、活動家にとって自らの被害に対する自らの闘いにもなったとしています。しかし、だからこそ、女性学的思

考を深めると同時に、運動と一体感を持つことによって、アイデンティティーの悩みを克服しようとしていた山下さんの試みは、挫折せざるをえなかったのではないか。社会全体の PTSD ということで、山下さんは何か納得したように見えます。このあたりで、何がどのように整理されたのか、実はされていないのか、伺いたいと思います。

第5章では、韓国における慰安婦問題解決運動の位相を、とりわけ性暴力追放運動との解決のなかで論じています。韓国の女性運動を簡単にマッピングしつつ、韓国の女性運動のなかで、女性の問題というのが民族の、あるいは資本主義の問題のなかの下位の部分に位置付けられたということが、ここでも指摘されています。山下さんの記述によれば、それが、どんどん表出されていったのが1990年代前半後半ぐらいに起こった性暴力追放運動でした。

この過程で慰安婦問題も社会化したということですが、そのなかで出てきた慰安婦像というのが、先ほども鄭柚鎮さんが、ここが非常に難しいところではないかと述べられていたような、売春婦であってはならない慰安婦像がどんどんつくられて定着していったということです。韓国の女性運動で、とりわけ慰安婦問題を展開していく運動する人たちは、朝鮮人の「慰安婦」は非常に純朴な娘たちだったと主張します。日本人で慰安婦になった人たちはそうではなかったと対置していくことで、慰安婦間のなかの分断をもたらししたということが述べられています。もちろん民族主義的な色彩の濃かった慰安婦問題解決運動の意義というのは、山下さんもとりあえずは認めています。一つ目に、こんにちの性暴力追放運動に貢献してきた。二つ目に、国際的な慰安婦問題、女性としてのアイデンティティーを迫認する場を持ち、国連の関連報告書が出されるまでになるような原動力になった。三つ目に、国内的には国際的な刺激を受けつつも、性暴力に対する女性運動の認識の拡張を促した。四つ目に、歴史のなかで抑圧されてきた人々が、南北の女性の協調の場をつくる中心になったということです。

しかしながら、慰安婦問題の性暴力的な本質と民族問題としての側面を、一貫性を持つ構造の問題としてとらえていくことが課題として残っていると指摘されています。その試金石として挙げられているのが、2000年の女性国際戦犯法廷でも提起された、日本人慰安婦の問題です。この日本人慰安婦の問題については、今、どのように問題化されているのか、いないのかということをご存じの人がいたら、いろいろご教示願いたいところです。

そして最後に、終章で「ナショナリズムを越えるために」というタイトルで話がされています。ここでは、2002年に立命館で開催された東アジア国家テロリズムのシンポジウムで、韓国の研究者の金貴玉（キム・グィオク）さんが、朝鮮戦争時に韓国軍が慰安所施設を持っていたという発表をしたところに対する反応の話から話が始まっています。金貴玉さんの発表は、韓国社会でも波紋を呼び、日本でも報道されました。とりわけ韓国での反応の中では、日本軍による慰安所施設との比較がなされました。第一に、日本軍慰安婦は一般女性が（半）強制的に連れていかれて、韓国軍の場合は職業女性を就業のために募集した、第二に、日本軍の場合は他民族による動員支配であり、韓国軍の場合はそうではないとする点を挙げています。

これに対して山下さんは、日本軍慰安婦問題を認識する際の被害女性の二分化の図式に通じるものがあることを指摘しつつ、自国、あるいは自民族内で性暴力被害者の抱える困難を、「民族が介入しないため」というふうにとらえる視点にこそ問題があると述べています。山下さんによれば、こうした「自民族内」とされる場合の困難さの要因にこそ、民族意識が介入しており、

山下さんのナショナリズム批判は、おそらく、このあたりに集約されるのではないかと思います。非常に大事だと思うので引用させていただきます。

「韓国軍「慰安婦」問題における韓国人被害者や日本軍「慰安婦」問題の日本人被害者が、加害者が同族であるという理由で被害を軽く見られたりまったく省みられないという状況を作り出すことこそ、ナショナリズムの防壁の仕業でなくてなんであろう。被害者中心主義というのは、まさにこうした被害者を民族によって分断するナショナリズムの防壁を壊すことであり、そのために内なるナショナリズム（それが意識的なものであれ無意識的なものであれ）を相対化させることではなかろうか。」(239)

直接的に被害を受けた人の痛みやその重みは、ナショナリズムという尺度で常に測られる。だからこそ、ナショナリズムは問題であるということです。

ここで、『和解のために』を書いた朴裕河さんの、日韓のナショナリズムにまつわる問題を解くためにあいだに立とうとするという話を、若干評価するかたちで引用しています。ただ、山下さんの朴裕河さんに対する評価は、山下さんが本書で問題にしようとしていることとつながっているようで、別問題であるような感じも受けます。とりあえずここでは一言だけ申し上げておきます。

山下さんは、朴裕河さんのあいだに立つというところに対して、非常に果敢な姿勢を評価すると言っていますが、ただ、その記述は、評価するというよりは、割と批判的に見ているように見受けられます。具体的にどこを評価しているかというのが実は少しわかりにくい。

あえて抽出すると、女性国際戦犯法廷（2000年）について、韓国側が、民族の問題が無視されたと総括したこと、およびそれに対する日本側の反応の鈍さを朴裕河が指摘している、というところでしょうか。つまり、韓国のナショナリズムに（日本側は）目をふさいでいる構造があるという点です。

そう考えると、あいだに立つということを評価しているというよりは、韓国のナショナリズムをきちんと批判するということを評価しているのかもしれない。もちろん、両者がきちんと批判し合うというのは、平等な関係の一つの表現であることはたしかでしょうし、支配者のナショナリズムと被支配者のナショナリズムは違うと主張することは、ここではあまり意味のないことでもあるでしょう。

最後にまた、アイデンティティについて述べています。山下さんが、留学先の韓国で慰安婦問題解決運動を通して強烈なナショナリズムに直面したことは、山下さんにとって非常に貴重な経験であったと述懐しつつ、「韓国の活動家たちとの「慰安婦」問題認識のズレを考えることで、私自身がとらわれてきたナショナル・アイデンティティの重圧から解き放たれ、その呪縛をある程度解くことができたからだ」(257)と述べています。この呪縛を解いたのは、国民なるものが自然に形成されたものではないということと、そのうえに、男性中心主義的に国民なるものが選別されてきたものであるという認識です。そのようなナショナル・アイデンティティの二者択一のなかで悩むことは、確かに非生産的です。排除、差別に抗する立場に身を置くことの大切さを実感し、その立場を与えてくれたのがフェミニズムだったというふうにしています。つまり、山下さんにとってナショナリズムとは、一つには、人を不当に選別・排除する考え方、もう一つには、フェミニズム的連帯を阻害するものであったと、いったん言えるのかもしれない

せん。

そろそろまとめに入らせていただきます。この本に接して私がまず惹かれたのは、「ナショナリズムの狭間」というところで、何かを勝手に期待して読んでいた部分もあったかと思います。ただ、読み進めていくうちに、ナショナリズムの狭間というよりは、フェミニズムからの韓国ナショナリズム批判、あるいは、韓国におけるナショナリズムとフェミニズムのあいだ、ないし狭間と言ったほうが正確なのではないか、と感じました。

とりあえず若干の違和感にも似た感覚を表明したうえで、論点として挙げたいことがいくつかあります。

これは私自身の課題でもあります。一つは、フェミニズムとナショナリズムの関係です。いったい、なぜこうもフェミニズムにナショナリズムの克服が課されるようなかたちで論じられるのかという点です。

これには、山下さんのこの本からも再度触発されましたが、もう一つの契機として、「女性・戦争・人権」学会で何年前に、『ジェンダーから見る日韓歴史教材』をつくったときにも感じたことです。近現代の日本と韓国の歴史を、日韓双方の研究者が「ジェンダーの視点から見る」という本でしたが、その作業が結局、その後の対話がないままに終わってしまっていることへの違和感です。また、本を作る過程で（私がその会議に参加したのは1回だけだったと思いますが）、双方の認識の違いが語られるときには決まって「日本の女性史は」とか、「韓国の女性史は」という話になる。「日本人」「韓国人」が常に主語になり、結局、マジョリティー女性たちがどうだったか、という話になりがちだった感がありました。

そうして結局、お互い学び合う場になるはずだった作業の過程が、何か「日本では」「いやいや韓国では」みたいな話に終始してしまい、対話がきちんと成り立っていなかった。その対話を阻害していたものは、いったい何だったのか。ナショナリズムだったのか、ということを再考したほうがいいのではないかなと思っています。

もう一つは、運動とアイデンティティーの問題です。1992年に日本で出版された『朝鮮人女性から見た慰安婦問題』（三一書房）という小さな本があります。日本で「慰安婦」問題が社会化して間もないころに出された本です。尹貞玉さんが80年代におこなった「慰安婦」問題の調査を山下さんが翻訳したものが掲載されています。そして、日本に住む在日朝鮮人女性数人と山下さんが論考を寄せています。読み返して改めて感じたのは、「慰安婦」問題にぶち当たって、自分が何者であるのか、あるいは日本のなかで何をしていくのかという、その活路を見出したと記述されている方が非常に多かったことです。

なぜ、そこに自分を賭けようとしたのかというのが、私には非常に不思議であったし、あまりうまく言えないのですが、そこに自分のアイデンティティの解決の道を見出すということは、一方で解決しなくちゃいけない「問題」というのがあって、そこに自分の問題を重ねていくということです。あまりうまく言葉が見つからないのですが、このやり方がいいのかどうか、ちょっと何か違うかもしれないと思ったんです。

運動するのに何者でもいいじゃないかという話が一方であって、しかしながら、とりわけ加害と被害というのがからむなかで、自分は何者かとしてではないとこの運動にかかわれない、あるいは、かかわっているあいだに結局、何者かというか、この場合は、「ナニ人」という民族

的所属だと思いますが、「ナニ人か」というのが問われてしまうというような運動の在り方が、確かにあった。悪いとは言わないけれども何か問題があるような気もするし、しかし何か被害や加害がからむような運動のなかでは、そうあるしかないんだと言えなくもない。どのように言ったらよいのか、迷っているところです。

これに若干かかわる問題で、運動と国家の距離の問題があると思います。とりわけ、私が韓国の女性運動を見ていて思うのは、女性運動に限らずですが、社会運動、市民運動のやり方が、何でもかんでも制度化していくことに非常に重きを置いていることです。それはもちろん、国家や政府に対する人々の思いとでもいいでしょうか、概念が日本とはだいぶ違うのかもしれませんが。この距離感も、もちろん歴史的につくられたものです。ナショナリズムの問題を考えるときに、この距離感の違いも一つ考慮に入れていかなくちゃいけないのではないかと思います。

三つ目に、ナショナリズム批判が1990年代以降とりわけ盛んになりました。おそらくそれは、当時は植民地主義批判と並行してなされていたと思います。しかし、最近、ナショナリズム批判は非常に強力に定着した一方で、植民地主義を批判するというのが何かやりにくくなっていくんじゃないかと私は感じています。

だからこそ、フェミニズムによるナショナリズム批判も含めて、植民地主義批判をもう1回、始め直さなくちゃいけないのではないかと考えているところです。

最後に、これは言っていないのかわからないですが、今回私はこういう機会をもらえて、役不足ではありましたが非常にうれしく思いました。でも一方で——ほかに言葉が見つからないので、そのまま言いますが——、何で「日本人」がこの評者のなかにいないのかと疑問に思いました。他意があるとか、そういうわけではおそらくないとは思いますが。そういう分け方自体がおかしいと批判されるかもしれませんが、なぜだろうなと思いました。

注

- 1) 慰安問題が起こったことに関しては、民族・女性（そして階級）が双方作用した。しかし、慰安婦「問題」と言ったときに、出来事の後のこと、（賠償と補償、「問題」を論じる言説、「問題」に関連する諸活動などのすべてが含まれており、問題の発生時には被害者の側にいた者たちが、加害や共犯、隠ぺいなどに回ることもある???)